

【研究・実践研究・実践報告】（いずれかを選択し、不要なものを削除してください）

## 研究大会 実践研究・実践報告の書き方

—サブテーマ（必要に応じて記入。不要の場合、1行削除）—

教育 太郎・相談 花子

KYOIUKU Tarou, SOUDAN Hanako

（所属） （所属）

### 1. 問題と目的

「実践研究」の場合、関連分野で先行研究がないことは、ほぼない。関連する先行研究をレビューして、そこで明らかになっていることと限界性を明確にする。つまり、先行研究の不十分なところを指摘し、その上で自身の研究のオリジナリティを述べる。

類似の先行研究があっても、実践対象が異なれば異なる結果が生じうるし、分析の観点が異なれば考察は全く異なることになる。この未知な部分に対しての仮説を立てて其れを検証することが「研究の目的」となる。

「実践報告」の場合は、その報告を理解するうえで必要になる背景等を記述し、その実践に取り組んだ問題意識や実践に至った経緯等を記述することも重要である。読者にとって大いに参考になるからである。重要なのは、「着眼点や実践の工夫・オリジナリティ」を明示することである。

### 2. 事例の概要

実践研究・実践報告のいずれの場合も、実践の対象になった児童・生徒・保護者、学級や学校等が存在する。ここではそれを「事例」と呼ぶ。

実践は、事例に何らかの変化を生じさせるために行われる。したがって、その実践を評価するためには事例の実践前後の状態が明記されている必要がある。そうでなければ、実践後の状態を記述しても、何がどう変わったのかを検討できない。

したがって、「事例の概要」をまずは書く。主観的な印象のみではなく、データ等を示すことが求められる。自尊感情の改善を企図したのであれば、実践の前後の自尊感情のデータが必要だし、学校適応の促進を企図したのであれば、友人関係の状態や遅刻欠席の日数なども必要になるだろう。

実践研究の場合は、こうしたデータがそろっていることが必須である。したがって実践研究は、実践開始前から研究計画を練り、仮説を立て、必要となるデータを計画的に集めておく必要がある。そうでなければ実践研究としては成立しない。

実践報告の場合もそうしたデータがそろっていることが望ましいが、実践研究ほどの厳密性は求められない。むしろ実践の中で気が付いていくことも多いのが教育実践であり、その実践のプロセスを丁寧に記述することが求められる。

### 3. 仮説と方針

次のステップは、事例についてのデータを何らかの理論等に照らして分析し、仮説を生成することである。実践研究では、この仮説を実践を通じて検証することになる。実践報告では、この仮説に基づいて、実践の方針を立て、実践することになる。

実践報告においても、同様のことが求められるが、実践の開始期にはおぼろげな方向性ぐらいしかわからず、実践のプロセスで徐々に生成されてくることが多いだろうがそれでよい。

### 4. 研究方法と実践計画

例えば実践の効果を測定するためには実践群の実践前後のデータだけではなく、実践をしていない対照群のデータを同時期に集め、比較するのが一般的である。つまり実践研究では、仮説を検証するために、いつ、どのようなデータを取り、どのような分析をするのかを十分検討しておく必要がある。

ただ、単学級の学校では対照群を設定することがそもそもできない。集められるデータには現実的には限界がある。そうした制約の中でどんな研究が可能かという視点も重要で、単一事例に適用可能な研究方法を選ぶ必要が

ある。このことは、研究方法を知っておくことの重要性を示唆している。

なお、このようなデータ収集から分析までの全体像を研究計画という。この研究計画が中途半端な状態で実践研究を始めてしまうと、途中で研究自体が行き詰まることになる。

一方、実践報告の場合は、これとは大きく異なる。結果を記述すること以上に、実践のプロセスをていねいに記述すること、それによる事例の変化をていねいに記述すること、さらにその事例の変化に対する実践者の考察等を記述することが重要になる。したがって研究計画よりも実践計画が重要であり、その実践計画が事例の変化に伴ってどのように修正・発展していったのかといった点の記述が重要になる。

## 5. 実践結果の記述と実践過程の記述

実践研究の場合は、まずはどのような分析手法を用いたのか、その結果、どんな分析結果となったのかを示し、仮説が検証されたかどうかを述べる。

実践報告の場合は、実践の進展に伴って事例が変化する。そこで、その変化に応じて、第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期といった具合に分割し、事例の状態、それに対する実践の詳細、実践に対する事例の反応や変化、その変化や反応に対する実践者の解釈や感想等を記入する。実践の過程がわかることが重要である。

事例についてのみ記述をしている実践報告が散見されるが、重要なことは、何が事例の変化を生み、その変化を実践者がどう読み取り、次の実践を修正していったかであり、そうした実践のダイナミズムが見える報告であることが望ましい。

## 6. 考 察

まずは事例の実践前の状態と、実践後の状態を比較検討することが必要になる。その変化を確認し、その変化が結局何によって生じたのかを考察していく。

冒頭の部分で書いた研究や報告の「目的」に立ち返り、その観点から生じた変化を検討し、得られた新しい知見や示唆を示すことが求められる。

考察の段階でよくみられる過ちは、実践がうまくいって「よかった」となってしまう報告や研究が多いということである。確かに実践がうまくいくことは重要だが、実践上の目的と、実践研究や実践報告の目的を混同して

はいけない。

実践研究の場合は、仮説が全面的に支持されることはむしろ少なく、部分的に検証される場合や、予想と異なる結果となる場合がある。そうした結果を再び理論に照らしながら総合的に考える。研究開始時点では考えていなかった理論を用いると説明できることもある。また、実践の在り方が予想と異なる部分に効果を与えていることもある。したがって、結果をていねいに検討することが求められる。

実践報告においても結果をていねいに検討することが必要なのは言うまでもないが、特に実践報告の場合は、実践者の感性や体験がより強い意味を持つため、時に自分の望む方向に解釈をしてしまうリスクがある。したがって考察にあたっては、恣意的な解釈に陥らないようにすることが重要である。

そのためには、何らかの理論に依拠して検討したり、他の解釈の可能性がないかを検討したり、有識者の解釈を参考に聴くなど、実践や自己を客観視する視点を持つことがもとめられる。

このような研究や報告を行うことで、実践・自己・事例を見つめる目が養われ、より優れた実践者として成長が可能になるのである。

## 7. 主要引用文献

引用文献と参考文献は基本的に異なる。参考にはしたが本文中には出てこない文献、すなわち参考文献は掲載しないのがルールである。

引用文献については文中では、著者名（西暦）で示すのが一般的である。引用したすべての文献について、著者のアルファベット順で明記する。論文の場合は、著者・論文名・雑誌名・巻・年・頁、単行本の場合は、著者・書名・発行所・年を必ず明記する。掲載は責務である。

**本稿は、研究大会発表論文集のため主要引用文献でよい。**

文献の記述例は学会 HP の投稿規程を参照すること

([https://jascg.info/wp-content/uploads/2023/07/2b086f583f0e7ffb72298a2ede\\_a22e7e.pdf](https://jascg.info/wp-content/uploads/2023/07/2b086f583f0e7ffb72298a2ede_a22e7e.pdf))